

[書 評]

Christina Hoenig

Plato's Timaeus and the Latin Tradition

Cambridge Classical Studies. Cambridge: Cambridge University Press, 2018,
pp. xvii + 331, ISBN: 978-1-108-41580-4, 223 × 144 × 24mm, £75.00

西 村 洋 平

本書は著者（以下、H）がケンブリッジ大学に提出した学位論文をまとめたものである。導入部（1-13）では、本書が扱う範囲が先行文献とともに簡潔に紹介され、各章の梗概が示される。全5章からなり、第1章（14-37）は『ティマイオス』（以下、*Tim.*）の解説がなされる。そして第2章（38-101）はキケロ、第3章（102-59）はアブレイウス、第4章（160-214）はカルキディウス、第5章（215-79）はアウグスティヌスを取り上げられ、最後の結論部（280-84）では短く全体のまとめがなされる。カルキディウスを扱った第4章はすでに論文として掲載されており（160 n. 1）、第2、3、5章もそれぞれ学会等で発表されているようである（xi）。豊富で最新のものまでカバーした文献表（285-304）と、主要なギリシア語とラテン語の索引に加え、引用されている著作の索引と、非常に細かく分類された主題・人物の索引が添えられている。

全体的な構成として第2-5章はそれぞれ独立して読めるが、すべてつながっている。重要なのはキケロとアウグスティヌスのラインであり、*Tim.* 読解を軸に両者の結びつきを論じるところに本書の主眼点があるだろう。Hは各哲学者の*Tim.* 解釈の特徴を明らかにする。そして、宇宙の始まりをめぐる解釈、永遠的なものと時間的なものの区分、その中間的存在（ダイモン、キリスト）、質料といった個別のテーマが取り上げられる。これらのテーマの選択理由は、アウグスティヌスという終着点と関連していることにあるだろう。

論述スタイルは極めてオーソドックスで、異論の検討や他の解釈の批判はすべて脚注でなされている。ただし、意外に重要な議論や論点が脚注で示されたりもする（e. g. 39, n. 11; 174 n. 50; 228, n. 50）。またHは自らの解釈上の立場を明確に述べるのだが、その主張と、提示される議論とのつながりが見えにくいことがある。

ラテン語による *Tim.* の翻訳・パラフレーズを引用するときには、必ず *Tim.* のギリシア語原文も並べられるため、比較がしやすいになっている。また H は引用テキストを表 (Table) としてまとめており、左に原文、右に英訳という二段組で掲載する。独自に段落番号・行数を振ってあり (A § 1, B § 3 など)、参照するには便利である。原文も英訳も必ず示されるのだが、おそらく個別に学会などで発表されている経緯もあって、同じテキストでも異なる訳が示されている場合もある (たとえば 99, Table 15. Plato, *Tim.* 29a2-b2 と、263, Table 34. Plato, *Tim.* 29a2-4 では訳が大きく異なる)。また、ギリシア語原文がおかしいところもある (e. g. 57, Table 3. A § 5, l. 38 = Plato, *Tim.* 29d2 の $\acute{\alpha}\pi\omicron$ — $\delta\epsilon\chi\omicron\mu\acute{\epsilon}\nu\omicron\upsilon\varsigma$ のダッシュは不要。同じミスは 170, Table 21. A § 5, l. 37 にもある)。

誤字脱字は少ないが (48 n. 42 The は There; 265 n. 126 ino は into), 脚注での参考文献の出版年の誤表記や、参照箇所への誤りなども散見される (e. g. 103 n. 5-6 の Sandy 1977 は 1997, 125 n. 79 の *Phys.* 4.2209b11-12 は 4.2, 209b11-12 だと思われる。同じ所の *Cael.* も同様で、その他、こうしたものがいくつかある)。また単語間のスペースが詰まりすぎていて、読みにくい箇所もある (e. g. 125, l. 14)。さらに読者にとって不便なところを挙げるとすれば、セクション番号がないことであろう。各章には 4-6 のセクションがあり、それぞれ見出しがボールドで、ヘッダーにも表記される。そのセクションは、さらにイタリック体で小見出しがつけられたサブセクション (H はそれを part と呼んだり section と呼んだりする) からなる。セクションやサブセクションが変わるところで、これまで議論されてきたことやつぎに議論されることが簡潔に示されるので、それを手掛かりにはできるだろうが、番号を振っておいても良かったと思われる。

ギリシア語で書かれた古代末期の *Tim.* 解釈と比較すればあまり注目されてこなかったラテン語の作家たちの解釈の伝統を論じることに本書の意義がある。解釈者の立場によって、同じ *Tim.* のテキストが異なる仕方でも読まれていることが説得的な仕方でも示されており、ローマ哲学の伝統のなかで、多様な解釈が存在していたことを知る事ができる。簡潔に紹介してみよう。

第 1 章は、本論の前提知識となる *Tim.* のコンテキストや宇宙創造論の紹介となっている。まず H は、語り手テイマイオスが自らの語りをエイコス・ロゴス ($\epsilon\iota\kappa\acute{\omega}\varsigma$ λόγος) と呼ぶときのエイコス (似ている、もっともらしい) の意味についての現代・古代の様々な解釈を取り上げる。つぎに、宇宙が「生成した」(28b7, $\gamma\acute{\epsilon}\gamma\omicron\nu\epsilon\nu$) という記述をめぐる古代以来の解釈が紹介される。これを字義通りに読むのか否か (あるいはむしろ時間的始まりがあるのか、宇宙は永遠にあるのか) は、この語りが「もっともらしい」とされていることゆえに問題となっている。その他、デミウルゴス、認識論や存在論的区別、他の神々 (星々)、受容体、など、2 章以降に扱われる個別テーマについても紹介がなされる。

ラテン哲学の伝統の最初に来るのがキケロである。まずHは第2章の前半部(44-83)で、キケロが弁論家でありかつ懐疑派という立場から *Tim.* を訳していることを示す。キケロは「カルネアデスの伝統と方法による」(Carneadeo more et modo, in the tradition and manner of Carneades)と述べるが、それはある問題に対する見解とそれへの異論・反論を検討する論争スタイル(disputatio in utramque partem)だという。カルネアデス流とはいえ、Hは、キケロがよりラディカルなカルネアデスの立場を取っていたという近年 Brittain が提示した解釈には与しないという(39 n. 11)。むしろ、弁論術を懐疑主義に取り入れ、「もっともらしいもの」(pithanon)により積極的な役割を与えるピロンの影響が見られるという。このことを *Tim.* の翻訳に用いられる語彙や、原文からの変更の分析を行うことを通して示すことが、この章の中核をなす試みである。

Hによれば、*Tim.* のエイコス、キケロによって probabile, veri simile さらには coniectura と訳されている(56-71)。また、理由を「述べよう」(*Tim.* 29d7, λέγωμεν)という一節を、キケロが quaeramus と訳していることにHは着目する(71-79)。つまりキケロは、個別の争いであるような訴訟(causa)と対比される、哲学者によって扱われるような普遍的なことについての「議論」(quaestio)だと捉えている(cf. *De inventione* 1.8)。この分割の背景にはアカデメイア派のピロンがおり(74-75)、この議論の方法の一つに推論(coniectura)があるという。さらに、29e4-30a1でデミウルゴスが善であり、いかなる妬みも持たないことが、知者たちによって伝えられた ἀρχὴν κυριωτάτην (authoritative principle) だという箇所の訳にHは着目する(79-80)。キケロは権威を認めるような「知者たちによって」(παρ' ἀνδρῶν φρονίμων)を意図的に訳さず、法廷弁論の文脈でも用いられるような, causa iustissima (the most justified reason) としている(このラテン語訳は、以下のアウグスティヌスにおいて重要な意味を持つことになる)。Hは、懐疑主義的で弁論術的な探求方法(sceptical-rhetorical investigation)を用いるアカデメイア派による *Tim.* の読みを訳で提示していると結論づける。つまり、*Tim.* でのエイコス・ロゴスは、普遍一般的な事柄の探求(quaestio de universo)に用いられる推論(coniectura)によって示された、最も正当化された(iustissima)、信頼性(fides)を持ちうるような、もっともらしい(probabilia, veri similia)見解である。

第2章の残りでのHの試みは、キケロが *Tim.* をアカデメイア派の見解だと理解していることを示そうというものである。Hは宇宙が時間的始まりを持っていたことや、宇宙が永遠であることを示唆するようなキケロによる意図的な翻訳・原文の改変に、他の著作での宇宙創造をめぐる論争に見られるアカデメイア派の主張と同じ要素が見られるとしている。それらは他の著作ではエピクロス派などの他学派によって批判される主張であり、*Tim.* の翻訳でもそうした宇宙の始まり

や永遠性についての論争をキケロは意識していたであろう、と H は結論づける。これは H の推測であり、議論は開かれている。

第 3 章は 2 世紀のアプレイウス（以下、Apul.）を取り上げる。Apul. は自らを神的哲学者プラトンと、彼の読者・聴衆とを結ぶ媒介者としての司祭（sacerdos）と位置づけている（108-12）。Apul. は、そうした神的知識に与っていることだけでなく、それを十全に伝達するための哲学的な弁論術・雄弁さの重要性も指摘する（112-17）。

H は、まず Apul. による *Tim.* の fides 解釈に着目し、彼のプラトン哲学への独自の立場を明らかにする。鍵となるのが、「つねにあるもの」と「つねに生成するもの」という *Tim.* 28d5-28a4 の存在論的区別と、それに対応する「真理」と「信念」という 29b2-d3 の認識論的区別を一緒にして論じる『プラトンの教説』（DPD）1.6 である。H によれば、Apul. は fides (*Tim.* 29c3 の πίστις の訳) を独自に解釈している。πίστις はプラトンでは確固としたものを対象とする真理と対比される、生成する世界に関わるものであるが、それを Apul. は、確固とした知性的なものを対象としたものとして導入している（アウグスティヌスも同じような解釈をとることになる）。この語はもはや真理と対比されるような認識論的に劣ったものではなく、真理に関わるような「確からしさ」（certainty）と結びつけられる（127-28）。こうした fides は他の箇所ではプラトンの教説だけではなくその他の宗教的な教説にも適用されるものだという。

また H は、*Tim.* で扱われる個別のテーマが Apul. にどのように解釈されているのか示す。まず Apul. は中期プラトン主義にも見られる議論を用いて、宇宙のはじまりは時間的ではないという解釈を取る。さらにこの Apul. によるプラトン解釈は、*De mundo* での「アリストテレス的」な、始まりを持たない宇宙の永遠性という解釈と整合的な仕方ではなされているのだという（130-35）。同じことが時間と天体の運動を同一視する解釈（DPD 1.10; *De mundo* 22, 338）の点でも言えるという（135-38）。残りのセクションで H は、Apul. の最高神、摂理、ダイモンといった神学的テーマを論じる（139-59）。これらのテーマはあまり *Tim.* と関連しないようにも見えるが、カルキディオスやアウグスティヌスの解釈・批判とも関連しているため論じられているように思われる。Apul. によれば、神の摂理・法（providentia, divina lex, 第一の摂理）は宇宙内部の天体にまず伝わり（第二の摂理、運命）、それを人間と同じ地に住むダイモンが介在する（ダイモン自身は第三の摂理ではないが、中間的位置づけについては *Tim.* 31c4-32a7 が源泉にあり、アウグスティヌスの章でも扱われることになる）。こうした神的摂理の伝播は *De mundo* における神的力（δύναμις）の伝達と平行に解釈されるのであり、Apul. はプラトンとアリストテレスを調和という立場に立っていたと H は結論づけている。

第4章はカルキディウス（以下、Cal.）を扱う。HはCal.の*Tim.* 翻訳・注釈のスタイルを、Osiusなる人物に宛てられた献呈（*Ep. ad Os.*）から読み取る。Cal.はそこで、*Tim.*の翻訳はいまだなされていなかったと述べており、Cic.の翻訳の存在を知らなかったようである。Cal.に課せられたことは、ギリシア語の読者が少なくなってきた当時のローマ世界に、プラトンの著作を紹介することであった。そのためにはプラトンの著作をモデル（*exemplum*）にした、似像（*simulacrum*）としての翻訳だけではなく、専門用語などについて説明（*explanatio*）をしなければならないとCal.は考えていた（164-68）。

この傾向が*Tim.* 29b2-d3の方法論の翻訳に現れることをHは示す。たとえば、人間は神々や万有の始まりについては、エイコス・ミュトス（もっともな物語）で満足しなければならないとされる箇所（29d1-3）は、*in rebus ita sublimibus mediocrem explanationem*と言われる。Hは、別の箇所の注釈などと結び付けつつ、*mediocrem explanationem*というのは、神学とは区別された自然学的なことについての説明だとしている（174-77）。またHは注釈23章を取り上げ、宇宙の創造について、カルキディウスは非時間的な始まりという立場にあるとする。しかし、宇宙が始まりを持ったのかと問う*Tim.* 28b4-7の翻訳では、原文にない「時間的始まり」（*exordium temporis, sortitus ex tempore*）という表現を用いている（この点はキケロと同様である）。Hによれば、これはCal.の「教育的配慮」だという。というのも、非時間的な神による、（非時間的な始まりをもつ）宇宙への原因性について、「時間的始まり」という表現のほうが読者にとってよりわかりやすいからだという。

さらにHは、Cal.の最高神（194-95）、運命・摂理（196-201）、ダイモン（201-206）、知性（206-208）、宇宙の諸原理とその原理を知るための方法論（208-13）といった個別のトピックを取り上げて解説をしてゆく。Cal.の思想の背後には（新プラトン主義も含まれるかもしれないが）おもに中期プラトン主義の議論があり、それらとの類似性と、Cal.の独自性（*idiosyncratic character*）をHは指摘する。神、知性、宇宙の魂という三つの階層や、運命などを宇宙の魂に割り当てること、ダイモンは火的存在（星）と土的存在（人間）の中間的存在として指定される（また、「悪魔」のようなネガティブな意味はないと教育的配慮から指摘される）など、中期プラトン主義にはない思想が展開されていることが示される。Hはそうした注釈を、プラトン主義資料の「パッチワーク」（214）と表現している。

第5章はアウグスティヌス（以下、Aug.）である。まずHはAug.の創造論と*Tim.*の関連を扱う（227-51）。アウグスティヌスはプラトンの*Tim.*が、時間的始まりを持っていること、創造されてから創造主の意志によって永続していると主張する点でキリスト教の創造論を支えるものだと考える（cf. *Civ.* 10.31; 12.12）。

むしろ、プラトンは聖書を知っていたのだとすら述べている (Civ. 8.11)。創世記の創造プロセスを非時間的なものとして区別する議論は、1 世紀以降のキリスト教の創造解釈のうちにも現れるが、聖書のうち非時間的な原因といった考への典拠がない。それゆえ H によれば、*Tim.* の宇宙創出をめぐる議論とその解釈がこうした創造論の源泉だという。「創世記」1.1 の天と地の創造を二つの質料の創造と捉える解釈は、Cal. にも見られる。H は、Aug. と Cal. が共通の資料 (おそらくオリゲネス) に基づいているのではないかと推測している (239-41)。

H はつぎに、*De consensu evangelistarum* 1.35.53 でのキケロの *Tim.* 翻訳がそのまま用いられ、キリスト論に *Tim.* 解釈が関連づけられていることを示す (251-70)。この議論が、本書のもう一つの主眼であるだろう。中期プラトン主義が *Tim.* の解釈を通して、知性的な世界と質料的な世界の中間的存在について議論したように、Aug. はキリストの神性を主張する文脈で *Tim.* を持ち出していることになる。引用される箇所は「存在」(οὐσία) と「生成」(γένεσις) という存在論的区別と、それに対応する「真理」(ἀλήθεια) と「信念」(πίστις) という認識論的区別が類比的に語られる 29c3 である。キケロによる οὐσία の訳は aeternitas であり、Aug. は永遠的存在と時間的存在の区別をここに読んでいる。また πίστις の訳は fides であるが、Aug. はこの fides をたんに認識論的なものではなく、時間的なものから永遠なものへの移行を可能にするものと捉えているという (257-58)。中間的な存在であるキリストはプラトンの知性的モデルのように exemplum であるが、プラトンのものとは異なり、生まれかつ永遠だという点で、それをモデルにする人間にとってアクセス可能な存在である。

キケロの引用のすぐ後で、Aug. はおそらく *Tim.* 31c4-32a7 の、火と土を媒介する、それぞれに似た媒介がなければならないという自然学的な議論とキリストの存在を結び付けているが、そこでは aeterna iustitia と temporalis iniquita を媒介する media iustitia temporalis と表現される。ここでの中間的な iustitia とは、罪から清められて義とされる (iustificati) ことであるが、神が善であることが最も本義的原理 (ἀρχὴν κυριωτάτην) だとする *Tim.* 29e4-30a1 のキケロの訳 (causa iustissima) ゆえに、ここで iustitia が論じられているのではないかと H は推測する (もちろん、キケロにとっては別の意味であった。上記参照)。

最後に H は Aug. による Apul. のダイモン論批判を検討する。Aug. は、Apul. のダイモンの定義に従うならば、ダイモンは人間と同じように情念を持つが、神と同じように永遠的であり、このひどい状態は人間よりも悲惨であると批判する (Civ. 8.16)。神と人間の本性を合わせ持つとすれば、不死で悲惨な状態か、至福で死すべきであるが、至福で不死なる天使はどちらにも当てはまらず、唯一キリストだけが媒介の存在となりうるのだと Aug. は議論する。

以上が H が本書で提示する、*Tim.* 解釈のラテンの伝統である。H は、ここで

指摘した以上の *Tim.* の箇所と関連テーマを取り上げ、それぞれの哲学者間の類似・影響関係を（明示的ではないが）示唆している。これらの点がつながるのかはもう少し議論があっても良いかもしれない。言葉上の表面的な類似、プラトン読解として当然の解釈なので共通している可能性もあるからである。また、キケロ解釈としては興味深い論点を提示しているように思われるが、その哲学的な内容（とりわけ永遠のアイデアのもっともらしい理解についてなど）についても少し踏み込んで議論してほしかったところである。Apul. の章は Aug. による批判のために準備されているような印象があり、*Tim.* 解釈とその位置づけがはっきりとしていないように思われる。Cal. も、本書の視点では他の哲学者たちと関連しないため、ラテンの伝統のなかでは薄れてしまっている。Cal. の中世への影響と比較して、このラテンの伝統での位置づけを論じてもよかったかもしれない。また Apul. と Cal. の研究に対する H の貢献も、（書評者はそもそも専門家ではないため）不明である。とはいえ、Aug. 研究者にとっては、Aug. につながるような様々な論点が随所に示されるため、本書は重要な資料・議論の宝庫となるだろう。逆に、ローマ哲学から Aug. につながる線を知ることできる。ラテンの伝統における *Tim.* 受容のルートマップと、その途中にある多様な解釈の伝統を示すことに本書は成功していることは確かである。